

伝えていきたい 平和の大切さ

戦争体験談 ① ～特攻隊として出征した体験



近藤伸一さん
(終戦時 15歳)

親孝行したい一心で特攻隊に志願

尋常高等小学校、現在の中学校の卒業が近づいてきたころ、私は進路に悩んでいました。当時の日本は、政治・経済・教育全てが軍国主義の中、「息子が戦地に行くことが家の誇り、親孝行」という世間の風潮でした。私は農家の長男として、とにかく親孝行をしたいと考えていました。

学校の先生に相談すると、軍隊への志願をすすめられた上、「近藤は、陸軍の戦車学校に行ったほうが良い。最難関の予科練に合格するのは難しいから」と言われたのです。負けず嫌いの私は、「何だ！ならば海軍に合格してやる！皆の憧れの七つボタンをつ

けるんだ」と、勉強に励み体を鍛え、3回目の試験を通り合格しました。しかし、両親は反対すると分かってい

たため黙って受験したのでした。

昭和19年5月、ついに召集令状が届くと、何も知らない両親はショックを受けた様子で黙っていました。出征を拒めば、非国民・国賊だったからです。

15歳、両親へ形見と遺書を

昭和20年8月13日、自分の最後の姿を写真に撮り、形見として爪・髪の毛が集められ、両親へ遺書を書きました。私は満15歳、日本のために命を捨てる覚悟を決めました。

8月14日、激戦の地・沖縄に向かうための輸送船が舞鶴港に現れません。不安と混乱の中、8月15日

の終戦を迎えました。後で分かったことですが、乗るはずだった船は途中で爆撃され沈没してしまったそうです。

敗戦に沈む10月、両親の待つ新潟に戻りました。特攻隊として国のために命を捨てると決意したのに、使命を果たせず無事に帰ってきてしまった私は、生きる意味を失っていました。時間が経つほど苦しみは深まるばかりでした。

その後、縁あって上京、そこで人々が苦しい中でも懸命にもがき前向きに生きる姿を見て、私ももう一度自分の人生を生きてみようと思えるようになりました。何事も真面目に誠実に取り組み、ガムシャラに生きてきました。

15歳で死ぬはずだった私は、95歳になりました。毎日、生きていることに感謝し、支えてくださる皆さんに感謝し、これからも、命ある限り自分の体験を語ってこうと決意しています。



▲入隊後、「七つボタン」の制服を着て

戦争体験談 ② ～埼玉県大宮で空襲を体験



近藤滋子さん
(終戦時 13歳)

軍事訓練一色の青春時代

私の青春時代は、なぎなたや竹やり・草刈りなど、軍事訓練の記憶で塗り潰されています。

毎月1日と15日は、女子学生が必勝のハチマキ姿で隊列を組み、日本は神の国だから必ず勝つと、「撃ちて止まん」「八紘一宇」と声を張り上げて叫びました。「お国が勝つまでは」を合言葉に贅沢は敵と見なされ、日常生活の細部に至るまで我慢我慢の日々でした。

空襲で焼け落ちた家

昭和20年3月の東京大空襲、毎日、東京方面の空は赤く焦げたようでした。そして4月、ついに大宮にもB29が襲来、駅の車両基地を狙った爆撃が開始されました。駅前の一角に住んでいた私たち家族は、必死で逃げた防空壕の中から、焼夷弾が間断なく降ってきて辺りが火の海になっていく様子を見ていました。「命が助かってよかった」と言う両親の

声に振り返ると、屋根も柱も真っ黒に焼け落ちた我が家がありました。その中で使えそうな量を重ねて雨風を避け、家族で肩を寄せ合い暮らすことになったのです。

配給制度の中で、サツマイモの蔓が一番のご馳走でした。終戦後の空虚な日々の中で、私たち庶民は必死に生きてきました。

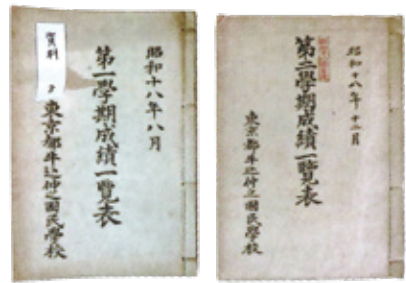
私は人の人生を翻弄し悲惨な目に合わせた戦争が嫌いです。戦争は人を不幸にします。その戦争を起こさないためには、私たち戦争体験者が体験を語り、戦争の悲劇を伝えていかななくてはなりません。家族・お友達・地域の皆さんと共に平和をつくり、日本から世界へと広げていきましょう。

学校に残る当時の記憶

区内の小学校で所蔵している、当時の子どもたちの様子が分かる資料を紹介します。



▲戦前の教科書(高等小學讀本・高等小學國史)



▲第一學期・第二學期成績一覽表(昭和18年)



▲学童疎開 目白駅に向かって(昭和19年)



▲青空教室(昭和20年)

区では、さまざまな平和啓発イベントを行っています。これまでに開催したイベントで、区内在住者に語っていただいた戦争体験談を紹介します。

☎総務課総務係 ☎(5273)3505



戦争体験談 ③ ～広島での被爆体験

一瞬で全てが焼け落ち、幼い弟の命も奪った原爆



吉濱幸子さん
(終戦時 14歳)

(新宿区被爆者の会「新和会」)

ピカーッと光って黄色に包まれ ドカーンという轟音と爆風が

昭和20年8月6日、私が旧制の高等女子学校の3年生、14歳の時の話です。私は広島市天満町にあった三宅製針という軍需工場に学徒動員として奉仕していました。天満町は爆心地から1.2kmと非常に近いところです。

その日の朝、空を飛ぶB29の銀色の機体から、ブルブルンと不気味な音が聞こえていましたが、空襲警報も警戒警報も解除され、それぞれの持ち場について作業を始めた時のことです。

振りかけの防空壕の穴の中で4～5人の友人と作業をしていたら、急に周囲がピカーッと光ったと思った途端、辺りが黄色に包まれ、すぐにドカーンという轟音がしました。爆風で吹き飛ばされたさまざまな破片が穴の中に次々と飛んできて、穴の中に伏せている私たちの頭上を埋め尽くしてしまいました。私たちは深さ1.5mの防空壕の穴の中で気絶していました。

しばらくして穴から這い出してみると、周囲の建物は全て崩れ落ち、至る所から火が立ち上り、朝なのにひどく薄暗く、「助けて」というめき声の方々に聞こ

えます。それは、まるで修羅場のようなものでした。

私は友人と手を取りながら、己斐(広島市西部)の山の方に逃げる人たちの無言の列に加わって逃げました。逃げる途中でねっとりとした黒い雨にあたり、それが露出した肌にまとわりつき、身も心も恐怖でいっぱいでした。

午後になって救援隊のトラックが来ました。友人の家がある大野(現・廿日市市)を目指し、そのトラックに乗って日本三景で有名な宮島口まで行きました。大野は宮島の隣の駅なので、そこからは友人と2人でとぼとぼと歩き友人の家に着きました。



▲私の親友でもあり命の恩人の友人と

私の家は爆心地の東の比治山公園という小高い丘のふもとにあったので、とても家に帰れる状態ではなく、友人の家に2日ほど泊めてもらいました。その後、友人のお父さんに自転車で家まで送ってもらうことになりました。

広島美しい川を屍が流れる 経験したことのない修羅場

広島市内の入りの己斐まではどうにか行けたのですが、そこから市内に入るのが大変でした。

広島は市内に6本の川(当時は7本)が流れ、その川の三角デルタの上に発展した美しい街です。そのため、家に帰るには川に架かった鉄橋を渡る必要がありました。鉄橋の枕木は全部焼け落ちていたので、残っていた鉄の部分だけをつかんでどうにか渡り切りました。渡っている途中で下を覗いてみると、水を求めて入水し溺れた人の屍が、いかだのように流れていました。

区の平和への取り組み

新宿区親と子の平和派遣

地域の平和の担い手を育むため、8月に区民の親子を広島と長崎に毎年交互に派遣しています。今年は広島に派遣しました。

☎総務課総務係

平和のポスター展

区立小・中学校の小学4年生～中学3年生が平和をテーマに描いたポスターを展示します。

☎右表のとおり(土・日曜日、祝日を除く)。時間はいずれも午前8時30分～午後5時(火曜日は午後7時まで(8月20日㈫は正午まで))

☎区役所本庁舎での展示…教育支援課教育活動支援係 ☎(3232)1054

▶特別出張所での展示…総務課総務係



会場	日程	展示作品
区役所本庁舎1階ロビー	8月20日㈫正午まで	最優秀賞・優秀賞・優良賞
特別出張所	▶ 筆筒町(筆筒町15)	9月2日㈫～11日㈮
	▶ 榎町(早稲田町85)	
	▶ 戸塚(高田馬場2-18-1)	
	▶ 落合第一(下落合4-6-7)	
	▶ 落合第二(中落合4-17-13)	9月16日㈫～25日㈮
	▶ 四谷(内藤町87)	
	▶ 若松町(若松町12-6)	
特別出張所	▶ 大久保(大久保2-12-7)	▶ 最優秀賞 ▶ 左記の各地域内の小・中学生の優秀賞・優良賞
	▶ 柏木(北新宿2-3-7)	
特別出張所	▶ 角筈(西新宿4-33-7)	